

## 万博計画具体化検討ワーキンググループ 議事要旨

日時：令和元年5月30日（木曜日）10時～12時

場所：大阪府咲洲庁舎50階迎賓会議室

出席委員（五十音順）：齋藤委員、佐野委員、澤田委員、橋爪委員

有識者（五十音順）：木村 麻子氏（一般社団法人全日本伝統文化後継者育成支援協会 代表理事）、河野 俊行氏（九州大学法学研究院主幹教授）、中川 雅永氏（公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構 常務理事）、野村 将揮氏（ダボス会議 Global Shaper）、平田 晃久氏（京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授）、松浦 竜太郎氏（株式会社乃村工芸社 クリエイティブディレクター）、山本 佳誌枝氏（公益財団法人山本能楽堂 事務局長）、吉田 憲司氏（国立民族学博物館 館長）

議事概要：経済産業省から大阪・関西万博について説明があった後、各有識者から大阪・関西万博の開催に向けたご意見紹介とWG委員と有識者とのフリーディスカッションを行った。主な意見は以下の通り。

（木村氏）

- ・ 日本最大の財産である日本の伝統文化が現在置かれている状況は、皆様もご存じの通りだと思う。日本人の生活の西洋化・国際化が進み、世界に誇る自国文化が危機的状況にある。この危機的状況をそのまま放置した場合、この10年の間に消滅してしまうと考えられる文化もある。こうした状況下でオリンピックや万博という国際的なイベントが開催されるのは、日本の伝統文化にとって非常に大きなチャンスであると考えている。
- ・ 大阪・関西万博は、日本の価値をしっかりと残す万博にするべきだと考えている。国際化が進む一方、日本の価値が失われてしまっは意味がないのではないかと考えている。アメリカの西海岸などで人気のある「マインドフルネス」の根底には日本文化や禅の思想がある。日本文化が世界に与えている影響は、私たちの想像以上に大きい。
- ・ なぜ今のような危機的状況に日本文化がなっているのか。現実社会や日々の生活、仕事の中で、日本文化が必要不可欠なものだと捉えられず、趣味や趣向だと認識されていることが根本的な原因である。武道や茶道、華道等の様々な日本文化があるが、日本国内においても海外においても、日本文化は「必要なもの」というより「楽しむもの」であり「豊かにするもの」として捉えられている。万博を通じて日本の文化を「人類の共通財産」として、新たな社会的価値を生み出すことができれば、その価値を残していけるのではないかと考えている。
- ・ 例えば、武道の身体作りや精神的な教育としての側面だけではなく、美と健康や医療等、私たちの生活や経済に、より効果的な影響があることを立証することができれば、人類の文化の発展に寄与することができるのではないかと考えている。日本には様々な武道があるが、日本における

競技人口は減少傾向にある。しかし、世界では3億人以上が日本の武道に親しんでいる。アニメが大きな経済効果を生んでいるのと同様に、武道も様々な経済効果を生む柱となる可能性がある。

- ・ 今回の万博は、空前の動員を記録した1970年の大阪万博に続く万博になる。世界中から多くの人々を迎える機会となる。単に日本文化を「素晴らしいでしょう」と紹介するだけではなく、研究も組み合わせたコンテンツを提供することができればよい。外国人に日本の文化を楽しんでもらいながら、それと同時に心拍数や脳科学的な分析を行う等、日本文化と研究を組み合わせたコンテンツを楽しんでもらうことができればよい。日本文化を楽しんでもらいながら、計測した数値を分析し、人類の発展のためにソースとして活用していくことができればよい。また、医療や美容等の様々な業界で使えるソースとなるのではないかと考えている。これは一つの流派や団体・会社では絶対にできない取り組みである。こうした取り組みこそが日本という価値を残すものになると考えている。
- ・ 大阪・関西万博を通じてインバウンドの土台となるリゾート化を図っていかなければならない。瀬戸内海について提案をしたい。瀬戸内海は非常に広域であり、大阪や兵庫、香川から九州まで含む日本最大の内海である。瀬戸内海の持つポテンシャルは非常に高い。瀬戸内のリゾート化計画を大阪・関西万博と同時に行うことは、万博後に大きな資産を残すことにはないかと考えている。しかし、現状ではインフラ整備や人材育成の面で遅れている。こうした取り組みを行っていくことも重要であると考えている。

(河野氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 二点申し上げたい。一つ目は時間の問題についてである。我々が生きているこの時代は、20世紀初頭の1901～1910年の10年間に匹敵する時代であると考えている。この時代はアメリカにおいて馬車が自動車に置き換わり、劇的に技術が変わっていった時代である。今から2025年までに何が起こるのか予想ができない。現在すごいと思っていることが2025年には当たり前になっているだろう。むしろ時間を越えた視点を出せないだろうか。
- ・ 1970年の大阪万博のレガシーとして太陽の塔が現代に残っているが、もともとは大阪万博の閉会後に解体する予定であった。今回は、計画当初から100年後や150年後に残すことを考えてコンセプトを作り、アクションを取ることはできないだろうか。様々なパビリオンが建設されて、万博の閉会後にそれらが潰されてしまうのは余りにも寂しく、SDGsにもそぐわない。
- ・ 最近ブラックホールの撮影に成功したというニュースに感動した。アインシュタインが100年前に予言したことをやっとなんぞ実証することができた。このようなスケールで科学者たちは仕事をしているということを理解してもらえる機会にしたい。日本の得意分野でもあるビッグサイエンスを万博で見せていくことができないだろうか。
- ・ 二つ目は、SDGsに関することである。今後、世界の人口はますます都市に集中し、都市に問題が集中していくと考えられる。それと同時に地方が衰退していく。これは日本が現在直

面している課題でもある。都市の課題を意識的に取上げ、日本の解決策を示すことができないか。日本のことを「解決先進国」と言うのは聞いたことはない。「課題先進国」といつまでも言うのは恥ずかしく、大阪・関西万博で日本や世界各国が解決策を示すことができればよい。

- ・ 都市の問題と同時に、地方をどうするのかという問題がある。万博では大阪だけが盛り上がるのではなく、大阪からスタートして地方に人が訪れるような仕掛けを作れないか。2018年、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録されたが、高齢化した集落を集落として残しながら、世界遺産登録による経済的な効果をどのように広げていくのか、まだ最適解は見えていない。世界遺産がない地方の状況はもっと厳しいかもしれない。大阪からスタートして、地方に人が訪れる仕掛けを作ることによって、一つの可能性を示すことが望ましい。

(中川氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 関西全体として、東京とは異なる価値を示すことができればよい。技術や文化で独特なものを示していくことが重要である。東京一極集中と言われているが、日本全体を考えるとバランスの取れた多極構造を目指すべきであると考えている。そのために今回の大阪・関西万博を上手く利用できればよい。
- ・ けいはんな学研都市(関西文化学術研究都市)は、平城京や平安京の跡地に囲まれた場所に立地しており、人と自然が共生する文化を受け継ぐ地域である。その遺伝子に立脚した共生の文化を示すことができればよい。
- ・ 関西地方は大阪の医療クラスターや神戸医療産業都市、けいはんな学研都市等の先端科学技術の集積地でもある。科学技術が人々の生活を変えていく中で、人間として失ってはならないものや残さなければならないもの、日本の和の力や共生の力などを、立場や主義・主張を超えて、テーマを定めて提示していく必要がある。
- ・ 科学技術や産業イノベーションの取り組みを先進国だけが享受するのではなく、途上国にも公平に機会が与えられるべきであると考えている。SDGsの目標達成に向けてそのような共通認識を持つ必要がある。
- ・ 持続可能な未来創造都市というものを提案する必要がある。けいはんな学研都市では生物多様性が高い里山の自然と融和した自然都市の実現を目指している。一方では様々な技術の実験都市でもある。持続可能な都市のあり方について、世界中から知恵を持ち寄ることができればよい。フューチャー・デザインという、七世代先のことを考えて現世のものごとを判断していくという考え方もある。世界中から知恵を持ち寄り、課題解決に取り組む場としてはどうか。
- ・ コンテンツとしては、人類の課題(苦痛)からの解放のために長寿と健康(特に心と脳健康)や食糧問題や安全な水確保などの研究成果と未来予想を見せてはどうか。
- ・ 多様な文化を受け入れる新しい社会を構築することに対して、貢献できる技術や社会サービ

スを見せてはどうか。

- ・ けいはんなの研究の強みであるi-brain(脳・人間科学技術)とICT(情報通信技術)による、心に感動・活力・共感を生み出す「超快適スマート社会」の創出の取り組みを示したい。
- ・ 人間に寄り添う技術が開発されるべきである。完全自動運転が本当に人間にとってよいものなのかという議論もある。人間の能力と意欲が減退しないようなデザインを見せていくのもよいだろう。
- ・ 国立国会図書館関西館が関西にはある。国会図書館として電子情報化が進められているので、ユニバーサル・アクセスの技術等を見せることもコンテンツとして考えられる。
- ・ 最先端の技術と関西が誇る文化や素晴らしい伝統工芸の融合について言及されることが多いが、最先端の技術をもってしても再現できないもの、すなわち人の手業の素晴らしさを見せていくことができればよいだろう。その一方で、最先端技術によってよみがえる文化や伝統工芸もあるのではないかと考えている。
- ・ 会場計画及びインフラ整備に関しては、多くの人々が集まるため、人の流れに気を配る必要がある。けいはんな学研都市では、スマート・ステーションの研究に取り組み、スムーズな人の流れや待ち時間を解消するシステムの研究を進めている。例えば、プロジェクションマッピングによる行動誘発などが一つのソリューションとして考えられる。
- ・ けいはんな学研都市には、本万博のテーマに関連する研究機関が多いことから、世界の学者、経営者、政治家などのリーダーがこれからの人類の課題を議論する場として、国際会議をレガシーとして残してはどうか。

(野村氏)

- ・ 本日は、若者世代の視点、医療・AIベンチャー経営者の視点、哲学徒の視点、の三つの視点をご提供したい。我々の世代(若者世代)は、一つのことに集中して生きていくということを前提としておらず、私もやりたいことを全てやることにしている。いつか哲学者になりたいと思い始めて10年が経過した折に経済産業省を飛び出し、今は医療・AIベンチャーの経営に携わりながら、財団で人類のWellbeingの何たるかを考えている。
- ・ さて、我々の世代が「万博」と聞いて思い浮かぶものと言えば、いいところ、漫画・映画「20世紀少年」と「モリゾー・キッコロ」の二つである。ここで会場にお聞きしたい。愛・地球博の目玉プロジェクトは何だったか。答えは「マンモスプロジェクト」である。愛・地球博が開催された2005年は、「電車男」や「ハリーポッター」が流行した。愛・地球博は「マンモスプロジェクト」を目玉にしていたわけだが、15年が経過した今日、どちらがより深く人の心に刻まれているだろうか。まず何より、レガシーとして人の心に何かを残す、ということがとても難しいのだということを強調したい。
- ・ 私の妹は、私と同様に富山県の地方都市で保育園から高校までを過ごし、今は看護師として地元で働いている。あくまで地方都市の若者の一事例として、妹にLINEで大阪・関西万博について聞いてみた実際のやりとりがこちら。ご覧のとおり、多くの若者は、大阪・関西万博の

開催年が2025年であるということすら知らない。私たちはこの事実を前提として考えなければならぬ。

- ・ しかし、漫画「スラムダンク」の名言にもあるが、決してまだ慌てる時間ではない。これからできることが数多く残されている。本WGの議論を振り返ると、委員・有識者からの「次世代、若者が大切である」といった前向きな発言も多い。次世代に対して本気で刺したいのであれば、私自身も協力を惜しまない。
- ・ ハーバード・ビジネス・レビューやニューヨーク・タイムズは、ときに「Generation Z」といった言葉を用いつつ、若い世代に焦点を当てた特集ページを作成しているほどである。世界の人口の半分以上は30歳以下であるという統計的事実もあり、これはダボス会議がGlobal Shapers Communityを創設した背景でもある。世界的には、若者がこれからの未来を作っていくという潮流が当然に前提とされている。
- ・ そもそも、「いのち輝く」とはどのようなことを指すのかということに真正面から向き合う必要がある。4月の半ばにWellbeing研究の大家であるエド・ディーナー博士や、米国心理学会の元会長であるマーティン・セリグマン博士らとのセッションをモデレートさせてもらったときの議論を少しご紹介したい。前提として、世界のWellbeingに関連する研究の7割はいわゆる欧米で実施されてきたものである。そして、日本でもよく話題になる世界幸福度調査は、ギャラップ社が毎年130カ国各1,000人、合計13万人を対象に実施している調査をもとにしている。その際の質問は大別して3種類あり、「昨日あなたは、これらの嬉しい感情を感じましたか。はい/いいえでお答えください」「同様に、これらの悲しい感情についてはどうですか」「想定する最高の人生が10点で最低の人生が0点であるならば、自分の人生に何点を付けますか」というものである。しかしながら、この調査が年1回のみの実施であることや、例えば日本のわびさび的価値観、すなわち、朽ちていくものから新たな生命力の息吹を見出す、ネガティブなものからポジティブなものを見出す、といった姿勢とは、この評価尺度はマッチしないだろう。我々の財団は、こういった既存のWellbeingの測定尺度をよりよいものにし、人類のWellbeingのさらなる実現に向けて活動している。
- ・ 今回の万博においては、人類の多様な「いのち輝く」を世界と共に考える機会にするべきではないか。換言すると、そもそも「いのち輝く」ことそれ自体が多様であると再認識する機会としていくべきではないか。一つの尺度で「いのち輝く」とは何かを定義する必要はなく、その多様性を受容するということである。
- ・ 例えば、いまやウェアラブル端末やセンサーによって、無意識下の精神状態の計測も可能になっている。今までの「幸福」や「いのち輝く」はあくまで自己認識できる範囲での自己申告だったが、もしウェアラブル端末やセンサーでフローやゾーン状態と言われる極限の集中状態を可視化できるのであれば、子供時点で、「才能」や「可能性」を再定義することが可能になるのではないか。「この子はこれに取り組むとフロー状態に入るから、これなら時間を忘れて没頭できるだろう」ということが分かり、それが家族や教員に共有され、然るべき教材や機会が与えられるのであれば、これも「いのち輝く」の一つのあり方になるのではないか。

- ・ 日立製作所で技師のトップを勤めている矢野和男博士らがこの種の研究に取り組んでいるが、これからの時代はもはやIoTではなく、IoH(Internet of Human)に移っていこう。人類にIoT的なものを付けて無意識をも計測し、どのように介入・改善していくかを考える時代である。このような前提を強く持って大阪・関西万博を進めてほしい。
- ・ 哲学的な観点から話をしたい。そもそも「いのち輝く」の前に、「いのち」とは何たるかという問題に真正面から向き合う必要がある。近代的個人を規定してきた概念をどのように超克するか。あるいは超克の可能性を、技術を用いて考えるということ。存在としての個人を規定してきた諸般の概念について、古い形容になるが、いわば脱構築を試みる。
- ・ 例えば、時間や空間を超えて他者視点で様々なものを追体験できる可能性はとても面白いと考えている。ミケランジェロの視点で天井画を描いてみると、芸術への理解が変わるだろう。ウサイン・ボルトの疾走スピードを体験することができれば、体を動かすということの理解が変わってくる。また、本人に責任を帰することができない、いわゆる構造的暴力、課題が山ほどある中で、個人という枠を超えて想像力を働かせ、共有する機会になり得るのが、今回の万博ではないか。
- ・ まとめとして三点挙げたい。若者世代の視点から、「若手のWGの設置」を提案したい。医療・AIベンチャー経営者の視点から、IoTからIoHが進んでいくという理解を前提とすることを促したい。哲学徒の視点から、「いのち輝く」は突き詰めれば思想的潮流の端緒となるはずだという大風呂敷を広げて考えることを期待したい。

(平田氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 山と屋根の写真を上空から見ると非常に似ている。なぜかと言うと、山は水の流れによって削られてできている。屋根は雨水を流すための構造になっている。人間は人が設計して屋根を作っていると思っているが、実は人間は水のエージェントとなって地形のようなものを作っているに過ぎないのかもしれない。建築物や都市というものを、自然や生命に近いものとして捉え直せば面白いのではないかと考えている。そのような視点で上空から農業などの活動を見ると、地表面を発酵させる微生物の活動のように見えてくる。こうした観点から建築や都市を考え直すと一体どのような都市ができるのか、ということが自分の基本的な興味である。
- ・ 虫取りが好きで、虫に魅了されながら堺市の泉北地域で育ってきた。虫が木々の間を飛んでいるのは非常に魅力的である。建築と自然の三次元的な空間のギャップが非常に大きいと感じている。現在手にしているテクノロジーによって、三次元的な都市を作ることが可能になるのではないかと考えている。
- ・ 建築や都市を自然に近づけていく際に、自分は「からまりしろ」というキーワードを持っている。何か何かに絡まるきっかけのことである。例えば、魚の卵が昆布に絡まり、昆布が海底の岩に絡まっていると、昆布は魚の卵にとってのからまりしろ、岩は昆布にとってのからまりしろとなる。「からまりしろ」は言葉を変えると、インフラストラクチャーと言えるかもしれない。197

0年の大阪万博の際は、黒川紀章氏や丹下健三氏ら様々な建築家が活躍した。彼らはメタボリズムという運動と深い関わりがあった。新陳代謝の概念である。このような生命的な概念が建築界に当時から存在した。しかし、当時はまだ機械的な解釈でそれらが考えられていた。

- ・ もう少し柔らかい生命の概念で、都市と建築が重なっていくことを、今の時代においては考えられるようになってきていると感じている。昆布や海底の岩のようなものとして都市を考えていくということである。例えば、今回の大阪・関西万博で作られていくものの中で、魚の卵はたくさんあると思うが、昆布は何か、岩は何かを考えることによって、どの部分が閉会後も残っていくのか、別のものがそこに堆積したり、絡まったりしていきのかと次々に考えていくことができる。
- ・ もう一つ別の話をしたい。世界中のあらゆる気流をシミュレートできるウェブサイトがある。建築物と都市の間、あるいは地球の間には様々な微気候がある。今回、万博で生まれる微気候を分析し、設計に活かしていくことができればよいのではないかと考えている。
- ・ 流れを解析する技術は我々が手に入れつつあるものであり、ナビゲーションシステム等の人間と紐づけられたテクノロジーによって、人の流れも風の流れ・空気の流れのようなものとして捉えていくことができるだろう。駅から人が降りていく流れの中で、地上レベルのみで解決を試みるのではなく、三次元的な人の流れを作り出してもよいのではないかと考えている。会場は積層化が検討されていると聞いているが、それも含めて新しいモビリティの技術を活かし、三次元的な都市の可能性を断片的でもよいので示すことができればよいのではないかと考えている。構築物がその後、全く引き継ぐことができないようなものと無駄になってしまうが、新しいモビリティの技術を断片的にでも示すことができればよいと考えている。今後作られていく別の都市に引き継いでいけるような「インフラストラクチャー」にあたる部分にお金をかけ、印象的な、新しい都市のイメージを作っていくことも非常に重要なのではないかと考えている。
- ・ 1970年の大阪万博では、巨大な建築物としてのパビリオンが多数あった。一方で1975年の沖縄国際海洋博覧会では、パビリオンがほとんどなかった。この両極の間に何があるのかを提示していくことが重要である。
- ・ 自分は堺市出身なので、百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されるというニュースに高揚した。古代において、船が大阪湾から入ってきたときに、船から見える風景を考えて古墳が作られている。夢洲に建設される会場にどこか通じているものだと考えている。古代的なものと現代的なものがつながるようなコンテンツの考え方ができれば面白いのではないかと。
- ・ 科学的なものは、一昔前は専門家だけのものであった。しかし今では生活に完全に入り込んでいる。そうしたことを学びながら遊んだり、楽しんだりできるような、哲学的な問いと気軽な会話のレベルの話がリンクする教育でもあり、遊びでもあり、あるいは研究でもあるような場所が万博の跡地にできればよいと考えている。
- ・ 万博の跡地にできる都市や建築の姿にも、今までされていなかったような新しい建築の考え方によって、参画する人々が新しい建物を建てたり、研究基盤を建てたりするようなことになれば世界的に見ても非常にユニークなものになると考えている。建築都市の実験場として、

万博の閉会後も実験場であり続けることができればよい。

(松浦氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 心によるおもてなしで、皆の心が満たされる場を築いてほしいと考えている。そのために「疲れない万博」とすることが重要な課題であると考えている。心が豊かな状態でなくては想像力や吸収力が低下し、いくら素敵なものを作っても意味がなくなってしまう。有意義な時間を過ごしてもらうために様々な工夫が必要であると考えている。待ち時間を過ごすことができる場の計画が必要である。自分はミラノ万博を訪れたが、人気のあるパビリオンは6～7時間待ちで非常に疲弊してしまった。しかし、会場には飲食店やベンチ等のくつろぐスペースが十分に足りているとは感じなかった。今回の大阪・関西万博では、「待たせないシステム」の構築を考えていると思うが、パビリオンのキャパシティは限られているので、パビリオンを循環し続けることはできないだろう。次のパビリオン入館までの時間を過ごす場や仕掛けを作っていく必要がある。
- ・ 日本の四季の豊かさを、世界の人と共有できる仕掛けづくりを期待する。花や緑の香り、日本の四季を体感できる植栽計画は、脳の活性化、想像力の促進、幸福度の向上、癒し効果などが期待でき、効果的である。また、暮らしが四季と共に生きる文化であることも同時に紹介できればと考える。長寿とも深い関わりがある日本食が、健康食であることをアピールできる。
- ・ 万博後も持続可能な集いの場にしていただきたい。賑わいの記憶を活かし、その後も人が集う場に、例えば、海の上の近未来型植物園を設けることを一つの案として提案する。周辺の実環境と調和するし、子供たちの教育にも寄与することにつながる。
- ・ 世界に誇る日本の伝統工芸との融合も期待する。作家や職人による伝統工芸作品を、会場に織り交ぜて計画するのも一つの案。また伝統工芸の実演も組み込んでほしい。先人から受け継ぎ、継承し続けている日本の職人技は、世界中の人が注目している。
- ・ ランドスケープを充実させてほしい。丘、くぼみ、段上など、様々な地形をつくってほしいと考えている。憩いであったり、コミュニケーションであったり、多種多様な目的で豊かな時間を過ごせるような場づくりである。
- ・ モバイルアーキテクチャを提案する。ワンタッチで組み立てる、オリジナルテントのようなものを考案し、来場者一人ひとりが、先ほどの地形で、安らぐ自分の居場所を作れるようなものである。カラフルなテントが風景をつくり、それが変化し、この万博独自の景色をつくり出す。

(山本氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 万博は「世界平和につなげるためのもの」ということを大前提にして開催されるべきだと考えている。古来、中国や韓国から様々な文化や芸能が日本に流れてきたが、日本は島国であ

り次に行く場所がない。流れ着いた文化や芸能が溜まり、文化の吹き溜まりのようになって、蓄積・発酵していき独自の文化が生まれてきた。世界的に見ても平和の時代がこれだけ長く続いている国は他にない。日本は平和のための文化が生まれ、育まれた国であると考えている。大阪・関西は大陸から文化が最初に来た場所である。長い歴史を持ち、多様な文化の宝庫になっている。地形によって育まれた、特異性、特質性が生んだ魅力ある日本を世界に発信したい。

- ・ 太閤・豊臣秀吉が能に興味を持ち、能の愛好家になったことで、能そのものが変化した。天下人好みの絢爛豪華なものとなり、それが武家の式楽として江戸幕府にも引き継がれ、その後、庶民のための文楽や歌舞伎が生まれ、落語や講談など様々な芸能が育まれた。文化が吹き溜まりの中で影響を受けながら数珠つなぎになって形成されてきたのである。また、関西ではいけばなや茶道など日常の中で生活文化も楽しまれている。大阪・関西万博では、このような素晴らしい日本の文化を、現在、世界で親しまれているKARATEやBONSAI、ZENのように世界のスタンダードにすることが最も重要なことであると考えている。
- ・ 今回の万博は、日本文化の素晴らしさを世界に伝える最大のチャンスである。これまで知られていなかった日本文化が世界に発信され、世界のスタンダードになり、世界中で楽しめることによって経済効果が生まれ、国際的なプレゼンスも高まるのではないかと期待している。
- ・ 万博開催の際は、日本の文化や生活を外国の人々に紹介するのはもちろんであるが、様々な体験を交え、通り一遍な偽物の文化ではなく本物の、専門性や精神性が感じられるものを世界の人々に見せたいと考えている。日本文化は表面的な美しさに加え、その奥に潜む精神性が世界で高く評価されている。日本人としての基幹をなすその部分をより多くの方に理解してもらい、世界共通の概念としてシェアしてもらうことが何より大切だと思っている。
- ・ 文化は様々な隙間を埋めることができるものである。今回の万博ではSDGsの達成に向け、様々な隙間を文化で埋めることによって、それらが幅広く、厚みがあるものになると考えている。1970年の大阪万博の「お祭り広場」のレガシーを継承し、世界の人々が個人レベルの対話によって相互理解を深め、平和への思いを共有し、その種が世界各国に持ち帰られ、蒔かれ、育まれることで、世界平和につなげることも大切であり、万博を開催する意義がそこにあると考える。日本は吹き溜まりであり、今までは大陸から文化が押し寄せてきた状態であった。今度の万博では吹き溜まった素晴らしい文化を世界に発信するような機会になればよいと考えている。

(吉田氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 今回の万博の招致段階で設定されたテーマは「人類の健康・長寿への挑戦」であった。そのテーマを聞いたとき首を傾げた。世界でも抜きん出た高齢化社会である日本に生きる私たちにとって、高齢化社会が課題なのは言うまでもない。しかし、私が40年間関わってきた、ザンビアのチェワという民族の言葉の中に「長寿」や「健康」という単語を探しても見当たらない。

一番近いのは「いのち」という言葉である。現在のアフリカの人々にとっての課題は長寿や健康ではなく、生存そのものであると考えている。その後の検討を経て「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマになったことは歓迎している。そのコンセプトに文化という視点を十分に組み込む必要があると考えている。

- ・ 遺伝的な有効個体数という概念がある。遺伝的な多様性の指標である。人類の遺伝的多様性はゴリラやチンパンジーと比べて10分の1ほどであり、多様性が非常に低い。しかし、ゴリラやチンパンジーではなく、人類が地球上を覆いつくした理由は人類が文化的多様性を持つから以外にないだろう。「いのち輝く未来社会」を築くのであれば、人類の文化的多様性を守り、育てる仕組みを考えることが必要になるのではないか。
- ・ 参加国と共創する万博を企画段階から実現してもらいたい。参加国が自分たちの誇る技術や営みを示すことができる制度設計が必要であろう。そのために準備段階から日本の若手研究者やボランティアがそれぞれの国を訪れ、共同で企画を練り上げて展示につなげていく仕組みを作ることが求められるのではないか。その際には、展示のノウハウを持つ各国の美術館や博物館との連携が有効に機能すると考えている。このような取り組みによって、次世代における日本と世界各国の人的ネットワークも構築できると考えている。
- ・ コンテンツに関しては、SDGsを達成するための万博という主旨がもっと前面に押し出されてもよいのではないか。自分自身の存在や自分自身の文化に自信と誇りを持つことができなければ、持続可能な社会は築けない。万博の構想にあたっては、人類全体を俯瞰するような広い視野と、世界の人々がそれぞれ築いてきた文化への洞察が求められるだろう。「未来社会の実験場」というコンセプトを示しているが、そのコンセプトをSDGsの達成という目標と直結させると、より具体化しやすくなるのではないか。
- ・ IT技術を様々な部分に組み込もうとしているようだが、そうした技術から取り残された人々への目配りが必要だと考えている。IT大国と言われるインドでも、インターネットにアクセスできるのは人口の35%ほどであると言われている。決してITだけで人類全体を語ることはできない。
- ・ 最先端のライフサイエンスを提示しても、その恩恵を受けることができない人々が大半であるのが現状である。「未来社会の実験場」として、最先端技術が提示されるのは大歓迎であるが、そこに至る道筋が重要である。国立民族学博物館(以下:民博)では世界中から博物館の関係者を招き、博物館学の研修を4カ月間にわたって行っているが、彼ら/彼女らは民博の最先端技術を教えてもらうより、自分たちの持つ最低限のデジタル技術で博物館を運営する手法を教えてほしいと言っている。そのような仕組みもSDGsを考える上では必要である。

(経済産業省)

[個別ヒアリング(資料11～資料22)の内容紹介]

(澤田委員)

- ・ 万博には会場の中と会場の外の話がある。数多くの万博に携わってきたが、会場内で行えることは多くはない。万博を通じて社会が進展していくことが万博開催の上で最も重要なことであるが、それを促すために、会場の外側がどのようなになっているのかに気を配る必要がある。万博を事業的に成功させる必要はあるが、社会全体がある種の熱狂状態になり、社会進展を促すことも非常に重要である。
- ・ 東京では2020年に向けて、東京オリンピック・パラリンピックそのものとは関係がない都市開発が進んでいる。夏休みの宿題のようなもので、2020年を期限として皆がやる気になり様々なものが進んでいる。2025年に大阪・関西万博が開催される機会を捉え、関西で何をするのか、それまでに何を作るのか。大阪・関西万博で関西にある様々なものを見せるためには、そのときまでに完成していなければならない。関西全体、あるいは日本全体を巻き込み、万博を機会として捉えて会場の外側を作り出していくのが極めて重要である。会場の外側と万博の本体事業が上手く絡んでいくことができればよい。
- ・ 東京では、本日出たようなホットな意見が少ない。関西という遠いところで開催するイベントであるというイメージを持たれている。本日は「待ってられないからどんどん始める」などのホットな意見をいただいた。どんどん勝手に走っていただき、進めていただければよいのではないかと考えている。それが実現化し、コンテンツとなって目に見えてくれば、それをどのように夢洲の会場に結び付けていくのかといった議論も可能になる。
- ・ サテライト会場というよりネットワーク会場と位置づけ、関西全体で万博に取り組む「どこでも万博」のような状態になればよい。それを一元化して見せるのが夢洲であると考えている。夢洲から瀬戸内海に出たり、関西全体を周るように促す仕掛け作りが重要になる。
- ・ 「見せる万博」の時代は既に終わり、「作り出す万博」であるとする、作り出すのは一体誰なのかという話になる。多くの人を受け入れ、提案してもらったことを実現していくだけでは社会進展は起こらない。外側にいる人たちがそれをどのように活用していくのかを考え、それぞれで走っていかなければ万博の事業は一過性のもとなり、社会進展が起こらずに終わってしまう。今日はホットな意見が数多く出たので、博覧会協会を置き去りにしても、どんどん勝手に走って行ってほしい。

(佐野委員)

- ・ 澤田委員の話にもつながるが、万博への当事者意識をどのように広げていくかが課題であると考えている。有識者にご意見を伺ったり、または新聞・テレビ等で行われる様々なインタビューを拝見したりしていると、万博をこのようなものに「してほしい」という語尾がよく付いている。「してほしい」ではなく、「したい」という語尾が付いてくるような状況を生み出していきたく強く感じている。
- ・ 野村氏より「若い人たちに機会を」とのご発言があったが、私が当初から提起していた課題でもある。決して掛け声だけで終わらせてはならない。また、若者の中でも何かきっかけやコネクションがあって役割を得た人たちだけに輪が留まるのではなく、万博に関与する機会があ

るという情報や実感が広く行き渡るようにしたい。結果として、参加する/しないを選択するのは個人の自由だが、少なくともその機会が設けられ、知らされる必要がある。とはいえ、その仕掛けを作るのは非常に難しいのも事実。当事者意識を広げていくためのさらに具体的な提案をお願いしたい。

- ・ 世界の隅々とつながるという議論はたいがい、IT技術の活用という方向へ行きがちだが、それでは不十分であるという吉田館長のご意見は非常に重要であると捉えている。ITによるつながりではむしろ取りこぼされてしまう人々を巻き込んでいくにはどうすべきなのか、お考えをご教示いただきたい。

(吉田氏)

- ・ 民博のコレクションをもともと作っていた人や使っていた人、写真であれば撮影されたコミュニティの人たちのところへコレクションや写真を持っていき、新たな情報を付けてもらう取り組みを行っている。そのコレクションや写真の名前や使用法だけではなく、それについての自分たちの技術や記憶を語ってもらい、データベースに入力する「フォーラム型情報ミュージアム」というプロジェクトである。このプロジェクトに協力していただいている人たちは、民博のデータベースを育てるという以上に、このデータベースの作成に協力することによって、実際に会うことがないかもしれない自分の子孫に経験や記憶を伝えたいから協力をしていると話している。彼ら/彼女らには主にITを使って連絡を取っているが、ITにアクセスできないコミュニティの方も多いため、紙媒体で写真のファイルを作って持っていき、アルバムの形でお渡しするというアナログな活動も一緒にしている。ITが追い付かない部分は、結局は人が赴く以外に方法がない。
- ・ 今回の万博をきっかけに日本の若者たちが世界に出ていき、世界の人々と一緒に万博のコンセプトに向かって一緒に考えていくような活動ができればよい。その成果をITが使える部分はITを使って集積し、現地に還元することができればよい。結局は人、特に若い人々が重要になると考えている。民博創設時の核となった収蔵品は、当時まだ就職もしていない若手の研究者たちが世界中に散り、2,500点ものコレクションを集めてきたものである。太陽の塔の地下に人類の原点を示すというテーマのもと、仮面と彫像を中心にコレクションの展示をした。そのときに世界中に散っていった若者たちが民博を設立する際の最初の研究者であり、助手として就職した若者である。今回の万博でもこのような取り組みは十分に考えられる。

(齋藤委員)

- ・ 今回の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」である。テーマの中に「デザイン」という文言が入っているのがキーだと考えている。澤田委員の意見にもあったように、会場で見たいものを掘り下げるために関西各地を訪れる仕掛けができればよいのではないかと考えている。そのためにも、今のうちから大阪・関西として、あるいは日本としてSDGsやSociety 5.0が実装されている街や仕組みを作ることを頭に入れてデザインをしていかなければなら

ない。そうしなければ、2025年にそれらが反映・実装されているものがないのではないかと考えている。

- ・ 1970年の大阪万博では、日本から発信されたメタボリズムという、建築だけに留まらず、プロダクトデザイン等も含めた全てのデザインに対する一つの哲学があった。分野を問わず、日本だからこそできるデザインの哲学を打ち出していかなければならないと考えている。世界的に見て、大阪・関西万博から始まり、変わっていったというデザインの哲学を残していければよい。大阪・関西だけではなく、日本のデザイン業界として一丸になって取り組むべきことなのではないかと考えている。
- ・ 河野教授の「解決先進国」にならなければならないという意見は非常に重要であると考えている。2020年の10月から開催されるドバイ万博では、様々な問題や災害等に直面し、それを乗り越えた経験を単に見てもらうのではなく、それぞれの国に持ち帰ってインストールすることができるコンテンツを構想している。実際に万博で見たものを、自国に持ち帰りアクションを起こすことができるような構造や知財の仕組み・管理の手法を考えていかなければならない。
- ・ 「デザイン」がテーマになっているのは大きな特徴なので、しっかりと広域でデザインを考えていかなければならないと改めて考えた。

(野村氏)

- ・ 若い世代が大阪・関西万博をけん引し、主体として担っていくことを想定した場合、必要になるものが大別して三つある。
- ・ 一つ目は少額で構わないのだが、お金。大阪まで気軽に往復するだけの経済的余裕を、若者は一般に有しない。また、仮に経済力を有するにしても、そういった人材は他の仕事で相当程度の報酬を得られるので、どうしても、そちらを優先してしまう可能性がある。敢えて綺麗事抜きに言えば、お金は非常に重要。若者にはお金がない。
- ・ 二つ目はオーソリティ、権威付けの重要性。学生団体をはじめ、様々な若い団体が活動をしているが、他意なく言えば、本当に玉石混交で、多くの人が「また誰かが何かやっているらしい」と流している側面もある。どこまで本気なのか、どこまで画を描くことができるのか、どこまで実現できるのか。これを真剣に問われたとき、オーソリティがあることは、良し悪しは別にせよ、手っ取り早い担保になる。
- ・ ここまでの二つはあくまで建前で、三つ目が最も重要だが、「なんとなく楽しそう」という機運を作るということ。世の中は楽しそうなものに溢れており、よほど楽しそうでないと若者世代は参加してこない。万博の文脈で一緒に何かをやっていくのは楽しそうだが、と思ってもらえるよう、マーケティングの専門家とスキームを作っていくべきではないか。
- ・ 異なるレイヤーの話になるが、万博のポテンシャルをきちんと可視化していくことも重要だろう。若者は万博がどのようなものなのか分かっていない。また、そもそも、単に万博のみを個別のものとして語るのは矮小化された議論ではないか。この社会、人類の大きな流れがあって、

その流れの中の一つの機会として万博が存在する、という共通理解をきちんと作っていく必要になる。世代によるパラダイムなのか、人類なのか、それとも宇宙になるのか、こういった規模感の視点から万博が担う意味合いをきちんと提示していくことが重要。

- ・ 最後に、大阪・関西万博ではスタートアップも巻き込むことができればよい。自分も様々なチャンネルを使いながら、機運作りを含めて協力していきたいと考えている。

(橋爪委員)

- ・ 個別ヒアリングも含め、20名分の意見を集約するのは非常に困難であるが、本日の議論をまとめると以下の九点になるだろう。
- ・ 一点目として、2025年の大阪・関西万博では地域経済の活性化のために会場の中だけではなく、会場の外で何を展開していくのかが重要であるという意見があった。経済活性化と連動する文化的な面も重要である。瀬戸内海やけいはんな学研都市との連携に関しても意見があった。
- ・ 二点目として、時間の概念の考え方について意見をいただいた。レガシーのあり方については将来的に世界遺産になるようなものを計画時から考えていくという発想もある一方、太陽の塔のように半年で壊す予定のものだからこそ残されたということもあると私は考える。1970年の大阪万博では恒久施設として建造したものはほぼ全て壊され、鉄鋼館が唯一メモリアルミュージアム(EXPO'70パビリオン)として残ったという経緯もある。広い時間の概念で言うと、古代において、海から船で関西を訪れた人々がランドマークとして御陵を見たという意見もあった。大阪の人々にとって重要な西に向く軸線がある。四天王寺の山門から続く軸線で太陽の沈む方向に今回の万博の会場である夢洲があり、その先に朝鮮半島から大陸、ヨーロッパへとつながる。春分及び秋分の日、落日と共に四天王寺の西門が浄土へのゲートとなり、大阪とつながるという伝承が昔からある。大阪から見て陽が落ちる方向に夢洲があり、世界につながるという視点は大切なことだと従前から申し上げている。
- ・ 三点目として、関西は神戸医療産業都市やけいはんな学研都市等の先端科学技術の集積地であり、その特徴を生かした価値を博覧会で提示するべきだという意見があった。関連して、先端技術を活かして、従来の万博のイメージを脱却するための方法論が重要になるという意見もあった。
- ・ 四点目として、文化体験や伝統芸能、生活文化等の日本文化を世界に広げる機会として万博を捉えるべきであるという意見や、広げるだけではなく、日本文化を通じて世界の発展に寄与するべきであるという意見があった。また、それらと一緒に国内でも日本文化の価値を再考する機会にするべきだという意見もあった。朽ちていく中に美があるというわびさびの概念をどのように世界に理解してもらうのかも重要になる。愛・地球博では「グローバル」がキーワードであった。長久手の日本館では、環境に対する配慮をどのように見せるのかを考え、打ち水の見せ方を工夫していた。そうした取り組みとつながる議論のように感じた。
- ・ 五点目として、文化体験と最新テクノロジーをどのように連動させるのかについて、多くの意

見をいただいた。技術と体験をどのように身体的に融合するのかについて意見があった。IoTではなくIoHの時代になるという意見もあった。映画「マトリックス」のような、人間と機械が融合するというあり方になるのかもしれない。以前のWGでは機械やロボットに世界の人々を憑依させるという話やリアルな会場とバーチャルの会場の間を融合することが大切であるという議論、アバターの概念についての議論があった。

- ・ 六点目として、SDGsに関する考え方について様々な意見をいただいた。課題先進国ではなく、課題「解決」の先進国になるべきだという意見があった。ポストSDGsを検討しなければならないという意見や、SDGsの研究機関を設立するべきだという意見もあった。2025年はポストSDGsの議論が始まっていると考えられる。大阪・関西万博はポストSDGsに向けて考えていく場でもあるだろう。
- ・ 七点目として、参加国と共創する「コ・クリエーション」をどのように考えるのかについて意見をいただいた。世界の人々と共に企画段階から様々な仕組みを作ることが必要という意見があった。本日は一つのキーワードとして「祭り」が挙げられた。1970年の大阪万博のシンボルゾーンであるお祭り広場は、私の師匠である上田篤氏が命名した。その思いを受けながら、今回の大阪・関西万博では、空と書いて「くう」と呼ぶ、中心が空洞のゲートで、世界に開かれている丸い穴を考案した。日本的な空間の概念とつながっており、祭りのときだけそこに人が集まり、祭りが終わると人がいなくなって空っぽになる空間である。日本独自の哲学や思想を、会場計画にも反映させていきたい。
- ・ 八点目として、次世代の若者が活躍する万博にするべきだという多くの意見があった。1970年の大阪万博の際は丹下健三氏、岡本太郎氏が50代であった。50代の方々が当時30代であった黒川紀章氏らと一緒に万博の基幹施設を作った。「若者」や「次世代」の定義の問題がある。1970年当時の50代は大先生だったかもしれないが、今の50代をどう見るのか。どの世代を「次世代」と見なすのか。次のフェーズはワーキンググループなどで検討している段階ではなく、具体的なプロジェクトを進める段階になる。若者や次世代を活用する場合、どのような形が良いのか考えていかなければならない。
- ・ メタボリズムの話が出たが、メタボリズムは1970年の大阪万博の10年以上前から始まっていた運動である。都市計画家である浅田孝氏が30代の後半にメタボリズムのグループを立ち上げ、約10年が経過した時期に万博が開催された。アイデアや取り組みは既に存在していたが、博覧会を契機に広がっていったのがメタボリズムであり、決して、万博のためにメタボリズムを始めたわけではないということは強調しておきたい。
- ・ 九点目として、「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマの中の「輝く」とは何を指すのかという意見があった。それはまさに多様であり、日本や世界各国の「いのち」を取り巻く状況をどのように考えていくのが重要になる。「いのち輝く未来社会」をデザインし、実装するとは、具体的にどのようなことなのかを、具体的に考えていかなければならない。